

〔一〕 次の文章を読んで、後の問い合わせに答えよ。解答番号は〔一〕の□1から□13までとする。

以下に紹介するのは、現代の“批評家”をめぐる寓話である。

アメリカの小さな町の話だ。この町のレストランには、自分がグルメ評論家であると店主に伝え、特別な席やサービスを要求する客たちが増えつあった。

アメリカにも「食べログ」のような、飲食店の口コミサイトが存在する。彼ら（自称グルメ評論家たち）は、その口コミサイトのレビュアーたちである。

ネットで低い評価をつけられることを恐れる飲食店側は、彼らの要求に応じざるをえない。自称グルメ評論家たちは次第に増長し、横暴になっていく。

耐えかねた一人の店主が、勇気を持つてレビュアーたちを追い出すことに成功した。すると、町中の飲食店が、レビュアー立ち入り禁止の看板を立て始めた。誰も言い出せなかつただけで、レビュアーたちの横暴さに怒りを覚えていたのだ。それで特別なサービスを与えられていた彼らは、もうレストランに足を踏み入れられないという罰を受けたのである。

この寓話から思い起こされるのは、かつて評論家の大宅壯一が、テレビの登場した頃に指摘した言葉「一億総評論家」である。

実はこの言葉は、彼が生み出したもう一つの流行語「一億総白痴化」を補足するために生まれたものだ。大宅は、テレビやラジオといった大衆向けの「マス・コミ」が登場したことで社会全体がテイゾクな側に引っ張られてしまうことを危惧し、「一億総白痴化」という造語を生み出した。

その一方で、テレビの視聴者参加型番組や新聞、雑誌の投稿欄など双方向性の部分を「有意義な機能」として捉え、「一億総評論家」の語をテイシヨウしたのだ（『一億総評論家』時代 1958年）。

それから半世紀後、双方向の機能に特化したソーシャルメディアの登場は、「一億総評論家」的な状況をさらに前に進めた。

この寓話が描いているように、ネットのレビュア―たちの口コミ評価は、数値化され、実社会（飲食店の来客数）に影響を与えた。そこで何が起きたか。人々の□に火がついてしまったのだ。

寓話にはまだ続きがある。

□ 6

自称グルメ評論家の一人であるカートマンは、特別なサービスを受けられなくなつたことに不満を感じ、レビュア―たちを集めた決起集会を開く。彼は演説し「レビュア―が増え過ぎたこと」に問題があるのだと主張した。

カートマンはエセ評論家たちを追い出すことで、いたたんは失つた権威を再び取り戻すことができると考えたのだ。

もちろん、カートマンは自分こそが本物で、集会に集まつたレビュア―たちはエセ評論家だと思っている。しかし、集まつた全員が、実は同じように考えていた。皆それぞれが自分こそは本物のグルメ評論家であり、その言説によつて、レストラン選びに迷つてゐる一般の人々に対して強い影響力を持つ存在、ひいてはその活動を通して町全体を精神的にリードする指導者なのだと信じきつてゐるわけである。

カートマンの演説に煽られたレビュア―たちは、自分たちの側に正義があると強く認識したようで、突如、行動を起こした。彼らが向かつたのは、レビュア―たちを追い出した飲食店。町の平和は乱され、レビュア―対レストランの対立は、住民をシングカンさせる全面戦争へと発展していく――。

この寓話とは、シニカルな内容で知られるアメリカのアニメーション番組「サウスパーク」の中の一話（シーズン19「食べるログ」お断り」、原題「You're Not Yelling」）である。

このアニメーションが放送されたのは、2015年のこと。つまり、まだトランプ現象もキヤンセル・カルチャー（過去のSNSなどの発言をもとに、批判が殺到すること）で、現在の職や地位を失つてしまつ現象。19年に当時の前アメリカ大統領バラク・オバマが警鐘を鳴らした）の嵐も吹き荒れていらないタイミングで描かれているのだ。

右であろうが左であろうが、ソーシャルメディア時代にピープルズ・パワーが増大し、無用な争いが巻き起こることを、この寓話は少しだけ早くから予見していた。

この寓話の後半で皮肉として描かれているのは、レビュアーや批評家たちの誰もが、自分こそがまともな意見の持ち主で、社会によい影響を与えていると信じて疑っていないというところ。実際、ネットの多くの炎上、さらに有名人らへの誹謗中傷も、集団心理が引き起こしている現象ではない。個々人にとっては、自分の正義感に基づいた素直な行動なのだ。その集合が、ネット炎上に見えているだけ、と認識している。ゆえに加害性などの自覚に結びつかず、同じことが何度も繰り返される。始末に負えない。

もう一つこの寓話から読み解くべき皮肉なポイントがある。

それは、<sup>(1)</sup>誰もが批評家になつていてもかかわらず、批評家が一番嫌われてもいるという点である。この矛盾した構図こそ、最も重要な寓話的要素だ。

ソーシャルメディア上では誰もが自由に発言、評論ができる。ブログやツイッター、フェイスブックの台頭を見てきた世代は、もちろんそれをポジティブなものとして捉えた。民主的で正しいことを言い合える場所の登場を誰もが無邪気に歓迎したのだ。そして、それまで机上の空論でしかなかつた「集合知」を実現するためのツールを実装できたのだとすら考えていた。だが、その状況は想像以上に早い段階で崩れていった。民主的な発言の場のはずだったソーシャルメディアは、早々に「オルタナティブ・ファクト」を発生させる装置となり、Qアノンから都市伝説まで雑多な陰謀論の培養液となり、政治的分断を進ませ、有名人が誹謗中傷で追い込まれる状況を生み続けた。

ただ、集合知がたちまち陰謀論に転じたわけではない。おそらく集合知と陰謀論の間を埋める存在が「共感」だつた。<sup>(2)</sup>ソーシャルメディアでは、「いいね」のボタンを通して共感を集めることができる。共感を多く集められる者が、発言の影響力を高め、いわゆるインフルエンサーと呼ばれる存在が生まれてきた。

多くの企業が「インフルエンサー・マーケティング」として、数十万単位のフォロワー数を持つている発信者を通じて商品の宣伝などを行ふようになるのは、2010年代以降。広告から口コミへ。<sup>(d)</sup>コウリツ的にモノを売る手法が変化したのだ。一方、彼らの目的が商品宣伝であることを隠したまま商品をすすめるステルスマーケティングが批判されることも増えている。

フォロワー数が学歴、面接、試験の点数などと同様に、就職活動における採用の判断基準にされることもある。人に共感されることの価値が相対的に上がり、それを集めるインフルエンサーは、現代の特権階級となつた。

一方、ソーシャルメディアが共感を集める競争になると、ネット上で批評家の態度が嫌われはじめる。共感を集めることと相反する態度が批評だつたからだ。

17年の東京都議選にて、人気グループSPEEDの元メンバーで自民党参議院議員の今井絵理子が選挙戦の応援メッセージとしてつぶやいた「『批判なき選挙、批判なき政治』を目指して」というツイート（@Eriko\_imai 17年6月23日、抜粋）は、まさに「批判」を含めた評論嫌いの時代を体現した内容といえる。

この今井のツイートは、政治への批判を許さないという特別な意識から生まれたわけではないのだろう。選挙戦も政治活動もネットにおける共感を軸に回すことによくなるという宣言、提案だつたよう思える。

何かを叩くよりも、褒めたり応援したりする態度でいた方が物事はよくなる。共感が重視される時代の価値観がまさに表れている。

政治に無知なタレント議員として侮られることが多いのだろうが、彼女は、共感と批判の対立構図を描き、たつた一つのつぶやきでそれを提示した。何が味方で何が敵かを見立てる能力が政治家としての必須の能力だとするなら、なかなか秀でたセンスといえるだろう。

ただ、こうしたスタンスは共感を過大評価しているように見える。<sup>(3)</sup>インフルエンサーには、常に“アンチ”と呼ばれる批判者たちがついて回る。そして、誹謗中傷にさらされ、さらには自殺につながるケースなどが社会問題になることもある。

多くの人から集めた共感は、脆いものもある。共感が裏切られる瞬間に、その感情は反転することもあるのだ。

「やはり人類にインターネットは早すぎた感しかない」(@tsuda 19年5月20日)とつぶやいたのは、ソーシャルメディアの可能性をいち早く論じたITジャーナリスト津田大介だった。だが、「人類」もそれなりにはネットのネガティブ面に対処している部分もあるだろう。

物心ついた頃にすでにソーシャルメディアが存在していたデジタルネイティブ世代は、ネットの負の側面を自明のものとして育たざるをえなかつたはずだ。おそらくもつともシンプルな対応策である「批評家的な上から目線の物言いを避ける」といったキハーン<sup>(c)</sup>を、対処法として学ぶというよりも、空気を読むように踏まえているといつていいだろう。ネットにおいて批評家が嫌われるのは、このようなメディア環境の変化の中で自然に定着しつつある振る舞いの結果でもある。

世代によつて異なる批評との距離についても考察が必要だろう。ポピュラー音楽研究者の大和田俊之は、著作『アメリカ音楽の新しい地図』の中で“批評家が嫌われている”という状況を、ミュージシャンのチャンス・ザ・ラッパーがスパイク・リー監督の映画『シャイイラク』にツイッター上で噛みついた話を取り上げながら論じている。

映画『シャイイラク』は、シカゴのギヤングの抗争が絶えない地域の女性たちが、抗議の意味で男たちとのセックスをボイコットする物語で、古代ギリシャの戯曲『女の平和』を下敷きに仕立てたもの。チャンスは「リーの解釈行為そのものに苛立つてゐる」（114頁）のではないかと大和田はいう。

シカゴの女性たちの置かれた状況を当事者以外が作品化すること。つまり女性でもシカゴ出身でもないリー（チャンスはシカゴ出身。リーはニューヨーク出身）が作品として描くことは、他者の置かれた状況を勝手に「解釈」することに他ならない。④その暴力性をチャンスは咎め、噛みついのではないかと。

「批評」という行為のなかには、作品を分析し、解釈したり意味づけしたりといったことが含まれる。その中で「解釈」の部分が現代では嫌われつつある。そう捉えると腑に落ちることも多い。

一方、作品を作るという行為のなかにも批評性がある（むしろ多くを占めているともいえる）。例えば、スパイク・リーはシカゴの女性を描いてはいるが、同時に古代ギリシャ喜劇の地名をなぞらえるなど、作品にさまざまな意味を重ねている。これは「解釈」の積み重ねで作られた映画もあるのだ。

スパイク・リーが「解釈」をする側に立つとして、それを批判するチャンス・ザ・ラッパーは、何の側に立つてゐるのか。大和田の見立てでは「経験」だという。他者の置かれた状況は、あくまで他者の「経験」として受け止めるべきこと、つまり

11 をチャンスは重んじて いるのだと。

この議論は、「モノ消費」から「コト消費」へという消費の潮流を前提としている。<sup>(5)</sup>

チャンス・ザ・ラッパーは、ネットの配信で有名になつたミュージシャンだ。主な収益源は、ライブ出演やグッズの販売。CDなどの商品を軸とするのが「モノ消費」。そうではなく、ライブなどの体験を重視するのが「コト消費」。チャンスが重視する「経験」「体験」は、ソーシャルメディア発展以降の価値観を持つ、共感の延長線上で登場してきたアーティストにとって必須の要素だ。「解釈」対「経験」——ここには世代間の対立の側面もある。

チャンスの立場は、Z世代（1990年代半ばから2000年代生まれの世代）的だ。

ケーションに慣れ、作品も生み出してきた立場。そのなかでチャンスは、93年生まれでZ世代と親和性の高いラッパー。かたやリーザ・ブーマー世代（アメリカにおいてのベビーブーマー世代の幅は広い）。シカゴとニューヨークという、彼らが代表する都市の違いだけでなく、さらに深い対立点として、世代の違いが、批評（解釈）へのスタンスにも結びついているのだ。

（速水健朗「なぜ批評は嫌われるのか 「一億総評論家」の先に生じた事態とは」による。ただし、見出しを省略した）

11 を前提としたコミュニ

問一 本文の二重傍線部①～⑤の漢字と同じ漢字を含むものを、次の各項の中からそれぞれ選び、その番号をマークせよ。

- |    |               |    |               |
|----|---------------|----|---------------|
| 1  | ① ブクセを離れる     | 2  | 人気小説のブクヘン     |
| 2  | カゾクぐるみの付き合い   | 3  | 野球で使うキンブクバット  |
| 3  | 自動車ハツショウの地    | 4  | オリンピックをショウチする |
| 4  | 王位をケイショウする    | 5  | 旧制小学校のショウガ    |
| 5  | ジシンによる津波被害    | 6  | 時計のビヨウシン      |
| 6  | あの人はシンライできる   | 7  | シンジツを明らかにする   |
| 7  | 商品をコウニユウする    | 8  | 先制コウゲキをしかける   |
| 8  | 大きなコウヨウが見込まれる | 9  | 投手コウタイが告げられる  |
| 9  | 都心のハンカガイ      | 10 | 空手のシバン        |
| 10 | 最高裁の出したハンケツ   | 11 | 二律ハイハン        |

問二 空欄 6 に入る言葉として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 探求の精神    2 道徳心    3 論争本能    4 権力欲

- 7 傍線部①の状況に合致するものとして、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。
- 1 自分と考えが異なる他者の意見を、互いに尊重し合っている  
2 自分の意見こそがまともで社会に好影響を与えると全員が信じている  
3 他者の批評しか出来ない自分自身への嫌悪や苛立ちを全員が抱いている  
4 民主的な議論を通して集合知の形成を行うことに熱心である

問四 傍線部②の説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

8

- 1 民主的な議論でなく、「共感」の獲得競争が重要視された結果、ソーシャルメディアは偏見や不十分な証拠に基づく言説の発生装置になつたということ

- 2 「共感」を多く集める者が発言の影響力を高めた結果、ソーシャルメディアは一部のインフルエンサーのみによつて物事の正誤が決定される場になつたということ

- 3 多くの人間が「共感」できる集合知のあり方が民主的方法で議論された結果、ソーシャルメディア上では多くの者が理解可能な陰謀論が人気を博したということ

- 4 多様な人間が民主的な方法で集合知の実現に協力した結果、ソーシャルメディアは陰謀論に「共感」を示す者たちをも排除せず、受け入れるようになつたということ

問五

傍線部③の理由として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

9

- 1 「アンチ」による誹謗中傷の力は、共感の力を常に上回つてゐるから
- 2 自分に共感してくれる味方を見分ける能力は、政治家には必要ないから
- 3 「批判なき選挙」という共感重視のスローガンでは国民に支持されないから
- 4 共感と批判を、単純な二項対立の図式に落とし込むことはできないから

問六 傍線部④の理由として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 10
- 1 批評行為の一部である「解釈」が不可避的に持つ暴力性も、現代で批評が嫌われる一因だから
  - 2 「解釈」に伴う暴力性を回避するために、当事者の「経験」を尊重した慎重な「解釈」が必要だから
  - 3 シカゴ出身の女性が映画『シャイイラク』を撮って、暴力性のない「解釈」に基づいた作品にすべきだったから
  - 4 ニューヨーク出身の裕福なりーが、貧しいシカゴを映画の舞台にすることには暴力性が伴うから

- 問七 空欄 11 (二ヶ所ある)に入る言葉として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。
- 11
- 1 批評の価値
  - 2 マイノリティとしての自己
  - 3 文化多様性
  - 4 人生経験の豊かさ

問八 傍線部⑤に関する説明として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 12
- 1 「コト消費」は「モノ消費」と違い、共感を軸にする価値観や「経験」を重んじる態度との親和性が高い
  - 2 ネット上で安価に映画や音楽を楽しめるようになつたことで「モノ消費」が廃れ「コト消費」の潮流が生まれた
  - 3 リーは映画作品を通して観客に「映像体験」を与えるので「コト消費」と親和性が高いクリエイターである
  - 4 ゲッズやCDなどの「モノ」を販売するアーティストは「コト消費」ではなく「モノ消費」を重視している

問九 本文の主張と合致しないものを、次のなかから一つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 1950年代から指摘されていた「一億総評論家」的社会状況は、ソーシャルメディアの登場によつてさらに進んだ
- 2 現代社会では何かを叩いたり誹謗中傷するよりも、褒めたり応援する態度の方が物事は良くなりやすい
- 3 ネットのレビュアーライターたちを描いた「サウスパーク」のエピソードは、ソーシャルメディア時代の言論状況を予見して  
いた
- 4 現代社会では共感の獲得競争に勝利したインフルエンサーが特権階級のように扱われることがある

〔二〕 次の文章を読んで、後の問い合わせに答えよ。解答番号は、〔一〕の□1から□9までとする。

嘉祥寺僧都海惠といひける人の、いまだ若くて病大事にて、限りなりけるころ、寝入りたる人、にはかに起きて、「そこなる文、など取り入れぬぞ」と、厳しく言はれけれども、さる文なかりければ、うつつならずおぼえて、前なる者ども、<sup>(1)</sup>あきれあやしみけるに、自ら立ち走りて、明かり障子をあけて、<sup>(※たてぶみ)</sup>立文をとりて見ければ、者ども、まことにふしぎにおぼえて見る程に、これを広げて見て、しばしうち案じて、返事書きてさし置きて、又やがて寝入りにけり。

起き上りがりて、「ふしぎの夢を見たりつる」とて語られる。

「大きなる猿の、藍摺りの水干着たるが、立て文たる文を持ちて来つるを、<sup>(工)</sup>人の遅く取り入れつるに、自らこれを取りて見つれば、歌一首あり。

たのめつこぬ年月をかさねれば朽ちせぬ契りいかがむすばんとありつれば、御返事には、

心をばかけてぞたのむゆふだすき七のやしろの玉のいがきに

と書きてまるらせつるなり。これは山王よりの御歌をたまはりて侍るなり」と語られければ、前なる人、<sup>(4)</sup>あさましくふしぎに覚えて、「これは、ただ今、うつつにはべる事なり。これこそ御文よ。又、書かせ給へる御返事よ」と言ひければ、正念に住して、前なる文どもを広げて見けるに、<sup>(5)</sup>つゆたがふ事なし。  
<sup>(6)</sup>その後、病怠りにけり。いとふしぎなり。

(『今物語』による)

※立文……正式な書状の包み方をした手紙。本文中の「立て文たる」の「立て文」はこの動詞化されたもの

※水干……糊を用いずに水張りにして干した布で作った狩衣の一種

※ゆふだすき……木綿で作ったたすき。神事を行う際に神官がかけたもの

※七のやしろ……日吉山王社のうち、特に信仰された上七社。「山王」はこの日吉社の神

※正念に住して……雑念を払つて一心に神仏を念じる

問一 波線部①～⑤の「人」のなかで、一つだけ異なる人物を指すものがある。最も適切なものを次のなかから選び、その番号

をマークせよ。

1 ⑦ 嘉祥寺僧都海惠といひける人

2 ④ 寝入りたる人

3 ⑥ 起き臥しもたやすからずなりたる人

4 ⑤ 人の遅く取り入れるに

問二 傍線部①はなぜか。その理由として、最も適切なものを次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 重い病でいよいよ最期という時になつて、それまでに受け取つた手紙を気にしていたから
- 2 重い病で体が動かないなかで「取り入れよ」と命じた手紙が、だが実際にはなかつたから
- 3 重い病で体が動かせないにもかかわらず口は達者で、周囲への叱責が一向にやまないから
- 4 重い病で意識がもうろうとし、何かに取り憑かれたように突然立ち上がり走り出したから

問三 二重傍線部Ⓐ～Ⓓのなかで一つだけ動作主の異なるものがある。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 3 1 Ⓢ まことにふしぎにおぼえて見る程に

- 2 Ⓣ これを広げて見て

- 3 Ⓣ しばしうち案じて

- 4 Ⓣ 返事書きてさし置きて

問四 傍線部②の内容にあてはまらないものを次の中から一つ選び、その番号をマークせよ。

- 4 1 正気とは思えないようなことを強く言つたこと

- 2 急に立ち上がり走り出しては、行動に出たこと

- 3 手紙に返事を書いたと思うと、またすぐに寝たこと

- 4 重い病で起きるのも横になるのも困難になつたこと

問五 傍線部③は誰を敬つた言葉か。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 5 1 海恵 2 大きなる猿 3 山王 4 前なる人

問六 傍線部④はどのような心境か。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 6 1 不思議な言動を続ける海恵の口にした夢の内容が、実際に目の前で起こったことで驚きが増している
- 2 不思議で予測不可能な言動をとり続ける海恵に翻弄されどおしで、応接に困つてうんざりしつつある
- 3 重い病の海恵がこれ以上不思議な言動をとり続けないように、收拾をつけるべくとりはからつてている
- 4 不思議な言動をとり続ける海恵の口から山王のことが発せられ、人為を超えた神の力に驚嘆している

問七 傍線部⑤「つゆたがふ事なし」の「事」の内容として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 7 1 実際に猿が神の使者として手紙を持つてきたこと
- 2 重い病に陥った理由が判明し想像通りだつたこと
- 3 夢で見た文言と実際の手紙が全く違わなかつたこと
- 4 前なる人が実情を告げる状況まで夢の通りだつたこと

問八 傍線部⑥はなぜか。その理由として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 8 1 神の恨みに対し返歌をしたことで、かえつて怒りを買ったから
- 2 神の恨みに対し返歌をしたことで、海恵の誠意が認められたから
- 3 海恵に物の怪がとり憑き、非現実と現実が地続きになつたから
- 4 海恵に物の怪がとり憑いたものの、それが神の使いだつたから

問九

本文の趣旨として最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 海恵が物の怪に憑かれたように演じ周囲を欺いた
- 2 海恵が大きな猿になつた夢を見て病が重くなつた
- 3 海恵が神を軽視していたことが周囲に暴露された
- 4 海恵が夢の示唆のとおりに振る舞い病気が治つた

〔三〕 次の文章を読んで、後の問い合わせに答えよ。解答番号は〔三〕の□1から□8までとする。

観光は楽しい。観光とは「ここでないどこかへ出かけること」である。そうだとしたら、その定義上、観光が楽しくないはずはあり得ないからである。

「ここでないどこかへ出かけること」と言つても、観光はけつして、どこかの目的地にひたすらむかっていくといった殺風景な行為とは意味が違う。そういう観光は貧しい観光だ。<sup>①</sup>観光は、その道中のすべてが「ここでないどこか」へむかって動いていくことでなければならない。つまり観光は変化の感覚、動きの感覚、差異の体験などと言つたものに、終始貫かれながら、変化や動きや差異そのものを味わうという、ほんらいきわめてゴージャスな行為なのである。

私たちは見なれた日常生活のルーティーンから解き放たれて、車や列車のシートに体を沈める。動き出す。車窓から眺める景色はつぎつぎと移り変わっていく。目的地に着く。そこにはめったに見たことのない天然の驚異が待ちかまえている。観光をつうじて、私たちはたえず動きまわり、変化を味わい、感覚にもたらされる差異を楽しんでいる。その動き、変化、差異が、私たちに喜びの感情や快樂をもたらすのである。それは、芝居や映画を見る以上に、<sup>②</sup>祭りや音楽会以上に、長続きのする変化や差異の体験を与えてくれる。観光が、ほかの娯楽にはとても真似のできないような、全身、全感覚を巻込んだ変化や動きや差異の体験そのものにほかならないからである。

観光する私たちは、長時間にわたって実際に体を動かし、移動させながら、たえず感覚に新しいズレや変化を作り出していこうとしている。そして喜びや楽しさの感情が呼びさまされるのは、この新しいズレとか変化と言つたものによるのだ。<sup>ズレ</sup>差異の体験はこわばつた意識をマッサージする力を持つてゐる。それによって、私たちはふたたび、意識に自由でしなやかな流れを取りもどす。景色を眺めながら、意識のこわばりをマッサージする。観光はそのために考案された、サイコ・セラピーのための巧妙な仕組<sup>③</sup>なのである。

しかし、観光に出かけた私たちはしばしば、ちつとも観光を楽しんでいない自分を発見することになる。もちろん、連れが

悪かったことがあるだろう。体のコンディションだって、大きくそれに影響するはずだ。けれど、観光地がすっかり観光地としてできあがってしまった現代の日本でする観光が、ときどき「観光＝楽しい」という定義をかなえてくれないようと思えるのには、もっと重大なわけがあるのだ。それは、近代の観光が「ここでないどこかへ出かけること」という観光の定義を、<sup>④</sup> 文字どおり空間的な意味に取り違えていることと関係している。

車や列車にのって観光地に出かけ、名所旧跡を見、温泉につかったり、おみやげを買っても少しも喜びの感情がわいてこないとしたら、それはその観光が、変化や動きや差異の体験を与えてくれているように見えて、その実、そういうものの二セの体験しか与えていないからだ。私たちはそういう観光をしながら、記号としてすでに作りあげられてしまった風景のなめらかな表面上をただ横すべりしているだけなのだ。記号の空間としてすでにできあがってしまった風景の表面上をどんなにめまぐるしく駆け回ろうと、それは少しも本質的な変化や差異の体験をもたらしてはくれない。「ここでないどこかへ出かけ」ているようで、ほんとうは「ここ」を作りなしている風景の延長上で動きまわり、時間を消費しているにすぎない、というのが、この少しも楽しくない観光の原因なのである。

観光は「ここでないどこかへ出かける」ことだ。だとしたら、風景のなかを旅しながら、観光はフツと風景の「外部」に触ることのできるような体験を与えることができなければならない。なめらかな記号の空間としての風景をいつのまにか脱け出して、「」でないなんでもない「どこか」に踏み入ってしまうような観光。風光をのどかにめでるものとしての観光は、その定義をどこまでもおしすすめていけば、風景や風光と言った目に見える外側の空間にあるものをいつしか否定してしまうような、どこか不気味なところを持つようになってしまふのである。

そこへいくと、江戸時代の庶民なんかが楽しんでいた物見遊山の「宗教的観光」の方が、はるかに観光の名と定義にふさわしいもののように思える。大山や秋葉山や富士山や伊勢をめざすその観光の旅は、宗教的な旅であるとともに、つぎつぎと移り変わっていく風景の変化を愛で、道々の名所旧跡に足をとめながら、移動や変化そのものを楽しむ旅もある。しかし、その物見遊山の旅の目的地には、言つてみれば「観光の定義の極限」が待ちかまえている。それまで人々は道々の風景を楽しん

できたのに、その旅は風景を「見られる空間」として作り出す意識の働きが消滅していくような場に、人々を誘い込んでしまうのだ。物見遊山の「宗教的観光」は、いきなり人々をそういう場に連れ込もうとするのではなく、軽い楽しみでだまししながら、とうとう観光の極限、観光の極致にまで踏み入らせてしまう。その意味では、物見遊山は口先だけで本当はたいしていくじのない近代の都市生活者のエトスにふさわしい、たくみな観光のスタイルを作り出しているのである。

物見遊山の「宗教的観光」が作る大きな空間の構造のようなものを、ここでもう少し詳しく見てみるとしよう。物見遊山の道中をブラブラと楽しんでいる人々は、無責任な軽みの感覚のなかで、実際には知覚に与えられる差異の体験を楽しんでいるのだ。歩く身体の運動と一緒ににつぎつぎと変化していく風景は、どこかにピンを打つて体験を固定し、責任感を持った主体を作り出すきまじめさから解放された、華やいだ自由の感覚にぴったりと対応している。感覚にはたえず新しいズレが産まれ、リズミカルに揺れる歩く身体の音楽が、それをますます生き生きとしたものにするのだ。

ところで物見遊山の旅の楽しみが差異の体験に根ざしているとすると、そのことをもつとも象徴的にしめしているのは、ほかならぬ旅の「おみやげもの」なのである。旅の最中にはとりつかれたように買いあさった「おみやげもの」が、家についてみると、なにかつきものが落ちたように魅力を失ってしまう、という体験を私たちはよくする。それは「おみやげもの」が、物見遊山をつき動かしている差異の体験というものに深く結びついていて、みやげもの屋に一步足を踏み入れた私たちの気を狂わせてしまおう力を持っているからである。

(中沢新一『雪片曲線論』による)

問一 傍線部①はどういうことか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 どこまで移動しても、目にする景色が殺風景で、変化に乏しい観光
- 2 交通機関などを極力使わずに、徒歩で動きや変化を感じられる旅行
- 3 旅の途中で、できるだけ無駄遣いをしない、節約を重視する貧乏旅行
- 4 風光を楽しまず、無駄を排除し、ただ目的地を目指して移動する観光

問二 傍線部②はどういうことか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 映画鑑賞や観劇などとは異なり、自分の足で移動し、新奇なものに触れ、未知の香りが感じられること
- 2 鉄道旅行は、バーチャルリアリティなどでは味わうことのできないような、生の現実が体験できること
- 3 身体や精神が、日常空間から非日常空間へと向かっていく過程で、動的な感覚が五感に生じていること
- 4 日常的に生活している都市から、豊かな自然に向かう観光では、忘れていた生の喜びを実感できること

問三 傍線部③はどういうことか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 日常で同じような体験を繰り返している心身に、変化や差異を経験させることで柔軟性を取り戻す作用
- 2 認知のズレを自覚させる心理的な仕掛けを用いて、固定観念を取り除き柔軟な発想を促進する心理療法
- 3 新鮮な風景を見ながら、日々の暮らしで凝り固まつた身体のこわばりをマッサージで取り除く民間療法
- 4 患者が観光で体験するズレや変化を、前向きに喜んだり楽しんだりするために必要な心理的メカニズム

問四 傍線部④はどういうことか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

4

- 1 観光地の空間デザインを巧みに行えば旅客が増えるという誤った考え方
- 2 にぎやかな観光地に行きさえすれば満足のいく観光になるという誤解
- 3 ここではないどこかでさえあれば近場でも観光を楽しめるという認識
- 4 日常空間から物理的に移動することのみを重視してしまっている錯誤

5

- 問五 傍線部⑤はどういうことか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。
- 1 映像を見て観光地を巡った気になる、バーチャルな観光体験
  - 2 何の感慨もわかない観光資源を、時間を費やしてめぐる体験
  - 3 行為としては観光であるが、旅行者の認識が変化しない体験
  - 4 たくさん観光地を巡っているように、見せかけられた体験

6

問六 傍線部⑥はどういうことか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

- 1 予定調和的な観光体験ではなくコースを外れて寄り道をする体験
- 2 自らの寄つて立つ所が揺さぶられるような新奇な刺激を得る体験
- 3 風景を愛でるだけでなく車窓から手を伸ばして実際にふれる体験
- 4 見たことも無い文化を体験するために海外の国や地域に行く体験

問七 傍線部⑦であるのはなぜか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

7

- 1 旅行者が、神社仏閣を目指して観光に向かった結果、方向感覚を失つて目的地と異なるどこかに迷い込んでしまう体験こそが、新たな非日常経験となるから

- 2 旅行者が、神社仏閣を巡る観光は、道中の楽しみを全身、全感覚で味わいながらも、最終的にはつらく苦しい修行が待ち受けており、その落差が観光だから

- 3 旅行者が、道中で楽しい経験をしながら目的地に向かうと、いつの間にか辛く厳しい道のりでも楽に踏破できるようになり、成長を感じることができるから

- 4 旅行者が、神社仏閣に向かう道中で自然や文化等の観光資源を楽しんでいるうちに、観光の極致とも言えるような非日常を味わえる仕掛けになつてているから

問八 傍線部⑧はどういうことか。最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

8

- 1 捉えどころのない差異の体験を、写真として固定しておきつつ、その場を目いっぱい楽しむことができる疾走感  
2 日常生活から解放されて自由な感覚に浸るあまり、詳細な体験を記憶に固定する責任を果たせないという寂寥感  
3 日常生活のルーティーンに縛られた状態を脱し、身体的な躍動と共に変化や差異を全身、全感覚で楽しむ多幸感  
4 「旅の恥はかき捨て」とばかりに、日常空間における責任を放棄し、好きな格好をして気ままにふるまう恍惚感

(以下余白)